

地域がん登録からみた大腸癌検診の効果

服部 昌和* 井尾 浩一 大野 徳之
藤田 学 松田 一夫

1. はじめに

大腸癌集団検診の導入が大腸癌診療に及ぼした影響および効果について、福井県がん登録資料を用い、特に5年相対生存率を算出し検討した。

2. 方法

1984年から1996年までの福井県がん登録および大腸癌集団検診資料を用い、その罹患率、死亡率、進行度および5年相対生存率の推移について検討した。生存率は生命表法にて計算した実測生存率を、日本人のコホート生存率を用いて Ederer II 法で計算した期待生存率で除した相対生存率を示した。また、来院経路を集団検診発見群と病院発見群とにわけてそれぞれ比較検討した。

3. 結果

1984年に開始された福井県がん登録の精度は、登録におけるDCO率が87年以降毎年5%前後であり、大腸癌のDCO率も毎年2%前後で推移している。

大腸癌年齢調整罹患率の年次推移をみると、結腸癌は年々増加傾向にあり、直腸癌はほぼ横ばいから微増傾向にあった。また、年齢調整死亡率の推移では、結腸癌はほぼ横ばい、直腸癌はやや減少傾向にあり、さきの罹患率の推移との間に若干の乖離傾向が示唆され、検診を含めた2次予防の効果がみてとれた。

87年より便潜血を用いた大腸癌集団検診

が開始され、年間約37,000人前後が受診、カバー率は平均約18%前後である。要精検率は約5%、例年登録大腸癌の約12%が集検発見癌として報告されている。

がん登録における大腸癌壁深達度の推移をみると、集団検診開始後の87年より早期癌比率が増加、近年では登録癌の約25%が早期癌として診断登録されている。早期癌の比率は、集検発見群ではその60.1%が早期癌であったのに対し、病院発見群では20.2%と有意に低かった。

85年に48.7%であった結腸癌の5年相対生存率は、93年には69.9%と改善、直腸癌も51.7%から60.0%となった。集検発見群と病院発見群には生存率に有意な差を認めており、地域がん登録からみても検診の効果が示された。集検発見群と病院発見群についてさまざまな要因について検討したところ、集検発見群の特徴として、病院発見群よりも左側結腸癌の発見率が高く、しかも部位別の検討においては左側結腸癌が他の右側結腸や直腸に比して有意に生存率が良好であることが分かった。早期発見のみならずこの部位的な違いも集検発見群の成績がよい一因とみられた。

4. おわりに

精度の高いがん登録を用いて大腸癌集団検診の効果について検討した。5年相対生存率では有意に集検発見群において成績が良好であり、早期発見による要因が大きいと考えら

*福井県がん登録室，福井県立病院 外科
〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1

れるが、部分的な要因の可能性も示唆された。 および治療の変化などの要因についても検討
 今後も精度の高い地域がん登録を用い、診断 が必要と考えられた。

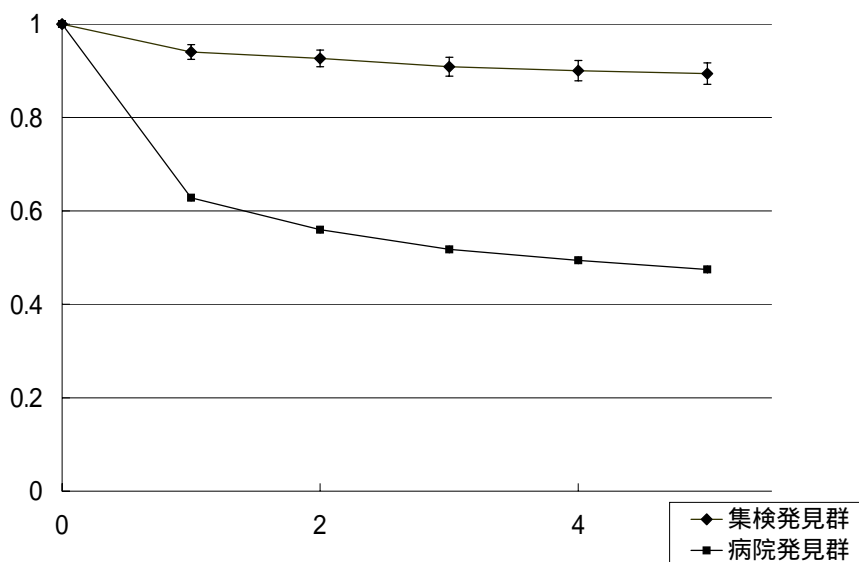


図 動機別 5年相対生存率